# 手先の動きと子どもの感情 ④

清水エミ子

子どもたちは自分の体の前で、自分の手を、そしてゆびを、しゅん間しゅん間無意識に動かしている。

無意識なのだな、とわかるのは、½秒位の早さで変化してしまうからだ。そして、二度と同じように動かすことはないと思われる。よく似ていて同じようにみえても、どこか表情がちがっている。手やゆびのあげ方、あげた角度は同じであっても、その時、その時の手とゆびの表わす表情は、ちがっている。

おんなじつくえに　すわったのにみやこちゃんの手はあったかかったよ。
そいで　さよこちゃんの手はつめたい。どうしてかなあー　ふしぎだね。
あたしの手はどっちだったか　わからなかったの。
せんせい　どっちかみてよ。

と、きよみが、私の前に手をひろげて示した。私は、きよみが、私との握手で、どんなことを発見するか、ためしてみたくなったので、だまって手をにぎっていた。

すると、

あれ　せんせいはちっとあったかいね。あたしは　そいじゃ　ちっとつめたいの？

と、私の顔を真けんに見上げていってから、

せんせい　みやこちゃんと手をつないだときね　みやこちゃんたら　ゆびをちょこちょこ　ちょこちょこ　うごかすの。
さよちゃんはね　おとなしいつなぎかた。
おもしろいでしょう。
ちょこちょこうごかすと　あったかい手になるのかな。

じっとしてるとつめたくなるのかな。

と、ひとりごとのようにつぶやいていたのだ。

私はこのきよみのことばを、ひとりひとりたしかめてみたくなった。

## 一、保育者(私)から、積極的に手をつないでみることにした。(この時の手とゆびの反応をみる)

**◎条件**

・活動をしていない時

・ひとりでいる時(活動に入る前や、後の時)

・気づかれないように、なるべくうしろやよこから自然の状態で手をにぎるようにする。

・にぎって反応をみてから、「いっしょにあそびましょう」とか「あったかい手ね」などと話しかけてみるようにする。

**◎反応のタイプ**

**①・私の手がふれると同時にきんちょうし、ピクッと、ゆびをうごかし、つながれるままでいる。**

・きんちょうし、ピクッとゆびを動かしてからキュッとにぎり返してくる。

こんな子は、はじめてれくさそうな顔をするが、ギュッとにぎりかえす前後に、ため息をついたり、私の顔をのぞきこんできてはなしはじめる。

・ピクッと反応してから、ピクピク、ひっきりなしに反応をくりかえしている。

思いがけないことで、びっくりしたり、うれしくて胸がドキドキしてしまい、ゆび先がうごきつづけている、と思われる子も多かった。

・ピク、ピク、と反応してから、こんどは自分から私の手をにぎり返してきたり、ゆびの第1、第2関節を動かして、ゆっくりの反応をしばらくつづけている。

・ピクッ、と反応して、私の顔をみてから、もう一方のあいている手の平を、にぎっている私の手の上にかさねてくる。

・ピクッと反応して、あわてて「なあに」とせきこんで問いかえしてくる。

このタイプの子どもたちは、自分は今しっぱいしていないのにどうしてしかられるのかという、ぼうぎょのたいせいで問いかえしてくる子が多いようだった。

**②・にぎったしゅん間的反応はないが、だまってつないでいるうちに、ゆっくりゆび先がうごき出してくる。**

・しばらくつないだあと、ピクッ、と反応がかえってきて、そ

のあとは、ある間かくをおいて、ゆび先が反応している。

・しばらくして、ゆっくりしたリズムでにぎりかえしてくる。

（手の平全部をつかってにぎりかえしの反応をする）

・しばらくしてから、一本のゆびを、私のゆび（ふれているゆび）にからませてくる。

・しばらくしてから、にぎった手を自分の思うままに、上に上げたり、よこにふったりしはじめ、次に話しはじめる。

③・ふれたとたんに手をふりはらってしまう。そしてその場から移動してしまう。

・ふれたとたんに手をふりはらってしまい、私の顔をみつめている。

この時、もう一度私が、だまって手をさしのべてみる。

・あらためて、手をにぎりにくる。

・手を自分のうしろにかくしてきょひを表わす。

・私のさしだす手をみながら、のそのそその場から移動していく。しかしさりげないような表われもみえる。

・自分の手を、もういちどみなおして、おずおずと手をさし出してくる。

あらためて、手をにぎったあとに、①や②や③の反応を表わしてくる子も多かった。

④・私のなすがままにまかせ、力を全くぬいてしまい、骨なしの手のようになってしまう。しかしこの時は顔がいろいろの表われ方を示していることを発見した。

◎考察

手をにぎると同時に私は子どもたちの顔での反応もつかみたいと思い、顔をのぞきこまないようにして観察することにつとめてみた。結果、やはり、しゅん間の反応はゆびの方が早い。まずゆびで、ピクッとか、ギュッとかいやと手をうしろにさけてから、顔での表われがおこるようだ。

これは、実験した八十名全員がゆび先の反応（何らかの）の方が先だったといえるようだ。

①の反応を示したタイプの子どもたちは、やや男児の方が多かったようだ。

第一回のはじめの反応のあと、ゆっくりゆびを私の手の中で動かし、いつまでも手をはなしたがらないタイプには、ひとりっ子、末っ子などの、まだまだ甘えたい気持の多い子どもたちに多かったようだ。

②の反応を示したタイプの子どもたちは、大半は、女児に多い反応のタイプのようだったが、ゆびをからませてくる子どもたちは男児に多く、生まれのおそい子どもたちに多くみられた。

ゆびをからませながら顔をのぞきこんで、次に自分からはなし

はじめ、なかなかゆびをはなそうとしないのだ。
まだまだ安定したり、しっかりとしたものにつかまっていたいという反応ではないかな、と考えられたのだ。
③の反応を示したタイプの子どもたちは、集団になじむのもおそかったし、友だちとの交わりも少ない、ひとりであそぶことをよろこびやすい子どもたちに多かったし、消極的で、どんなことも友だちの後からついていっても、まんぞくしてしまうタイプの子どもたちのようだ。
ひとつの活動から次の活動に移るのに時間がかかり、どんなことにもなじむまでに時間のかかる子どもたちのようだ。
以上のように大ざっぱにみとおすことができるように思われた。
しかし、これは、この反応を示した時の条件での結果であることを忘れてはならないと思う。
この実験、反応調査をくりかえして行ない、その結果での考察でなければ信頼性はとてもうすいことはわかるが、しかし、この一回ないし、二、三回の反応からも、大きく三つのタイプが、見とおせたという結果からも、指先での表情の大切さと、それの持っている意味の大きいことを感じさせられたのだ。
受身の時のゆびや、手の反応の一部であることをもういちど考えると同時に、顔や体から、そしてことばから受ける反応、心の表われとはちがう、かくされた表われ（ピクッ、ピクッ、とするその表われ方、これは何かことばや文字で表わせないなんともいえない反応なのだ）があることをよみとるのには、すばらしい実験だったと思う。

子どもたちの心の中をしらせてくれる。

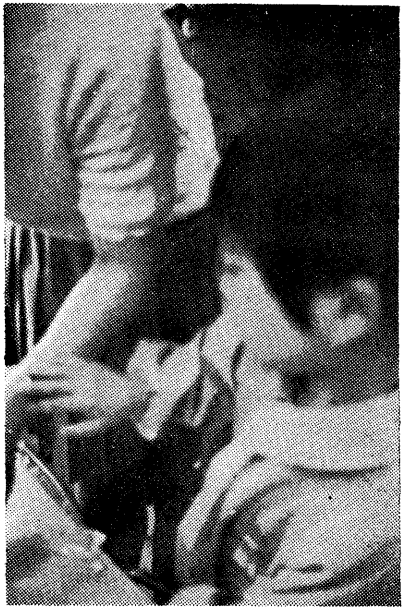
つかまえたせんせいの手。
あっちへいったり　こっちへいったり　なかなかつかまらなかったよ。

・子どもから、積極的に手をにぎりたいといってくる時。
・だまって私の手をそっとにぎってくる子。
・そばを通ったり、近づいてきて、さらりとなぜて通りすぎていってしまう子。
・うでを手のひらで、ペタリペタリとさわってきたがる子。
・ゆびをにぎるやいなや、自分の口に持っていってなめてしまう子。
など、子どもたちの方から、私の手やゆび、うでに積極的にはたらきかけてくる時の反応もいろいろであり、その子どもたちの心の表われであることに気づいたのだ。

写真①～⑥　保育者と子どもの手と手のふれあいのながれ

①

②



## 二、子どもたちから、積極的に、手をつなぎにくる時の、手とゆびの反応をみることにした。

◎条件

・なるべく子どもがひとりでいる時、そばに近づいていき、手がふれあいやすいように体を近づける。（活動していても、していなくてもよいことにした）

・なるべく自由な活動の時の反応をみるように心がけた。

◎反応のタイプ

①　意識して、自分のゆびをさかんに動かしながらふれてくる。

・ゆび一本、人指しゆび、中ゆび、というように特定のゆびを動かしながら、私のゆびを目がけて近づいてくる。

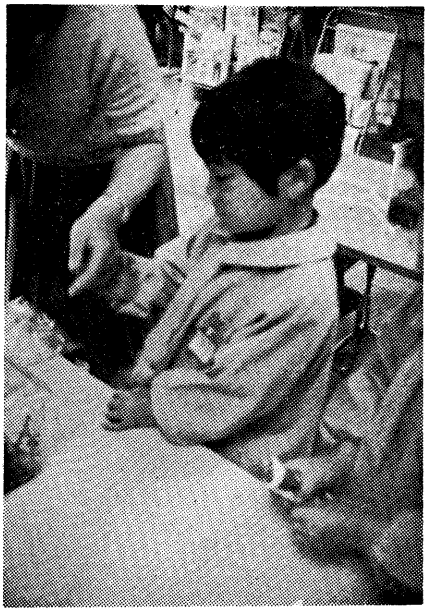
・手の平全体を何となく動かして、ふれてくる。

・小ゆびなどのよこばらを、私のうでにふれるというより、ぶつけてくるかっこうでふれてから手をつないでくる。

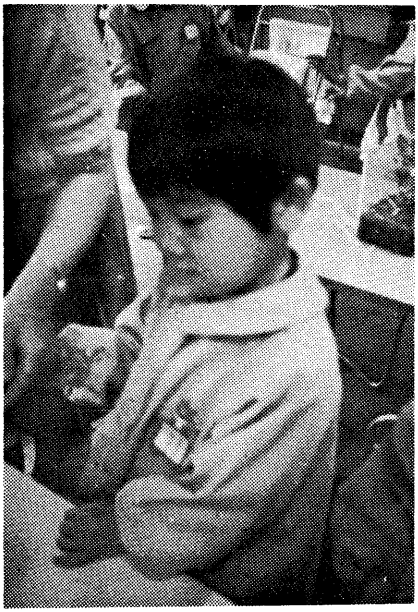
②　無意識のようなようすで、ゆびを少しうごかしふれてくる。（ふれるというより、さわったことをきっかけに手をつなぎたくなる）

・手やゆびにちょくせつさわってくるのでなく、私の服やズボン、スカートにさわって、ワンクッションおいてから手をにぎっ

③



④



てくる、ひかえめな子。

③　ふれたいのだが、どうやってよいかわからず、ゆびをこうちょくさせ、きんちょうさせてそっとふれてくる。

・人指しゆび、中ゆび、くすりゆびの三本をぎゅっとくっつけ、第二関節位までそらして、そっとふれてくる。

・小ゆびだけ、こちょこちょうごかして、私の小ゆびにからませてくる。

④　両方の手のひらで、私の手の平をめがけてつつみこんでくる。

・つないでと、ことばと同時につないでくる。

・かおをのぞきこんでから、手をにぎってくる。

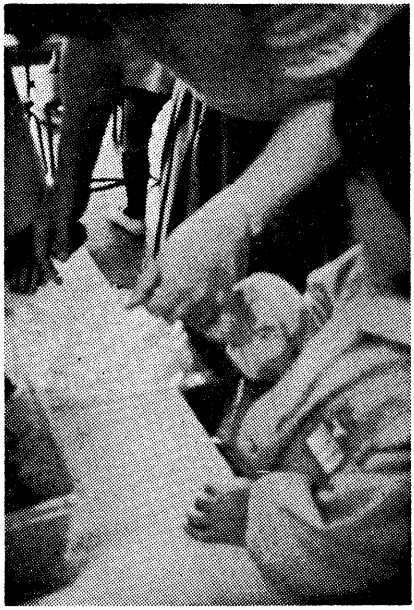
・しゅん間手をにぎってきて、それをふったり、持ち上げたり、両手で私の手を遊具のようにいじくりまわす。

というように、子どもたちからのはたらきかけには、保育者がはたらきかけていくのとはちがった表われがみられたし、心のこまかい動きをよみとるのにやくに立つことを発見したのだ。

◎考察

子どもが、私に近づいて来た時、私はなるべく、子どもがふれやすいように私の手の力をぬいて、ブラリと体のよこにぶらさげておくようにつとめた。

⑤



⑥

・これは、子どもたちがひとつのかまえの状態で私の手にはたらきかけるので、私の手にふれる前後の反応が、大へんに心を表わしていることに気づいたのだ。

先生と交わりたいという心が、手をつなぎたいという心が、ゆび先をきんちょうさせ、全神経がゆび先にあつまった状態で、私の手にちょうせんしてくる子どもたちと、全くリラックスして、ゆっくりした表われで（甘えるように）べったりと、私の手に向かってくるタイプに分かれるようだ。

ママ、あたしきょう　しらないうちに　せんせいと手つないでたの。いいきもちしたよ。

あたしもつなぎたいけど　どうやればいいの　おしえてよ。

と内気なひろ子が、母親に話しかけたことを次の日の朝母親から聞かされたのだ。

このように消極的な子どもたちが、保育者と手をつなぎたい、ゆび先にふれたいという心が、ゆび先のきんちょうから、うかがえるのだ。

何かはなしかけたい、たのみたいという心の表われをまず手をもち上げゆびに神経を集め保育者に近づいてくるのだ。そしてうでやゆびにそっとふれてから、顔をあからめたり、タメイキをついたりして、「あのねせんせい」とか、「これでいいの」とかはな

しはじめるのだ。

こんな消極的な子どもたちのゆび先をみつめ、私たち保育者をいつ、どんな状態でもとめているのかをよみとっていくことが大切だなあと、この実験をこころみて強く感じたのだ。

ぼくの手のあったかさと　せんせいの手のあったかさと　はじめはちがったんだよ。
でも、つないでたらおなじになっちゃったじゃない　ほらね。
きょうは　ぼくとせんせいが　いちばんのなかよしだからなんだね。

私は、このことばを聞いた時、子どもたちと手をふれ合わせること、手をにぎり、つなぐことが、こんなにも大きな意味を表わしているということをあらためて感じさせられたのです。

手の、ゆび先でのふれ合い、反応が、心と心を結び、信頼の心を育てていくということをはっきりと感じさせられたのです。

どんなによい保育をしても、活動もなげかけても、保育者と子どもたちの心が結ばれていなければ、表面的な活動で終わってしまいます。

心がかよい、そして信頼感がはっきりと生まれ、その心の上に安定して行なわれた活動こそ、子どもたちの血になり、肉になるのではないでしょうか。

子どもたちへ、積極的に手をふれていってみること、ゆびをからませ、手をにぎってみることをくりかえしていくなかで保育者と、その子どもの信頼の度合をたしかめていくことができます。

いろいろな場での手と、ゆび、手の平での反応で、心と心のつながりの程度をよみとる努力をしたいものです。

顔の表情、ことばの反応に合わせて、手やゆびの反応をみのがさないくんれんをしなくてはならないと、しみじみ思うのです。

子どもが積極的に手をさしのべ、にぎってくる時の反応でもその子どもとの信頼の程度がわかります。

いまは、全く安心し信頼し切って私の手をにぎりに来ている。こんな時、子どもたちは、ことばは少ないのです。顔や、体の表情も、わるくはないが、平凡な表われしかないのです。しかし、手やゆびは、はっきり、しょうじきに、反応してくれるのです。

子どもたちの手やゆび、手の平の反応を見つめ、いろいろな方法で、保育者が手やゆびを示し、反応をしていくことによって、子どもたちの信頼感が育っていくのです。

ただ、反応を見つめるだけでなく、心と心の結びつき、信頼感の度合をふかめ、ひろめていくために、手とゆびの反応を、多面的に見つめていきたいと考えます。

（大田区立蒲田幼稚園）